

脇本樂之軒 わきもと 美術史家。明治十六年九月十九日山口縣防府生乳  
 附和二十八年二月八日歿（八六三—六三）。本名十九郎 そくちゅう。筆名らくし軒主  
 人、吾妹子、周洋、樂之軒生、樂生、脇本、脇本生等。藤岡作太郎の  
 國文學を、中川忠順の美術史を學ぶ。明治四十年藤岡の口述『國文  
 學史講話』（明治四十一年二月十五日東京開成館・大阪開成館。復刊  
 ・大正十一年一月十五日岩波書店、のち昭和二十一年十一月十日岩波  
 書店『藤岡作太郎博士著作集』）の筆記に従事した他、その遺稿出版  
 にも盡力した。翌五年金港堂書籍株式會社編輯室を経て朝報社入社。大  
 正四年美術攻究會（のち東京美術研究所と改稱）を興し、昭和十一年  
 には機關誌『畫說』（十八年『美術史學』と改題）を創刊。二十二年  
 東京美術學校教授、二十五年東京藝術大學教授となる。文化財専門審  
 議會専門委員、國寶保存會委員、國立博物館評議員等歴任。  
 杉本普齋著『普齋未書』（昭和十五年一月四日自編刊）、『日本にお  
 ける外来文化』（他五名合著、昭和二十二年十月二十日吉川弘文館  
 『博物館文化史講座』）、『日本人の眼』（平成六年二月二十一日文  
 彩社）等刊。丸尾彰二郎・藤岡由夫・泉宏尚編『脇本樂之軒の心伝と  
 追憶』（昭和四十六年八月八日風  
 涛社）がある。

## 日本人の眼



脇本 楽之軒

日本人の眼

文彩社

楽之軒の眼、日本人の眼、現代人の眼、  
 大正から昭和前期、戦中、戦後と変化した時代、  
 脇本樂之軒は一旦して、国  
 家としての道義精神の崩  
 壊をみる。中川忠順、  
 日本美術の精神を、追憶し  
 た。追憶し、  
 楽之軒はここに描き出さ  
 れ、美の精神の追憶も、  
 そこには、現代人の心の眼  
 を映し出す。昭和十一年、  
 た何かが存在する。